機械学習による関数型ブーリアンプログラムの型推論

阿部晃典 住井英二郎 東北大学 大学院情報科学研究科

はじめに

静的型付けの問題点・型エラーの位置は論理的には 曖昧で一意には特定できない

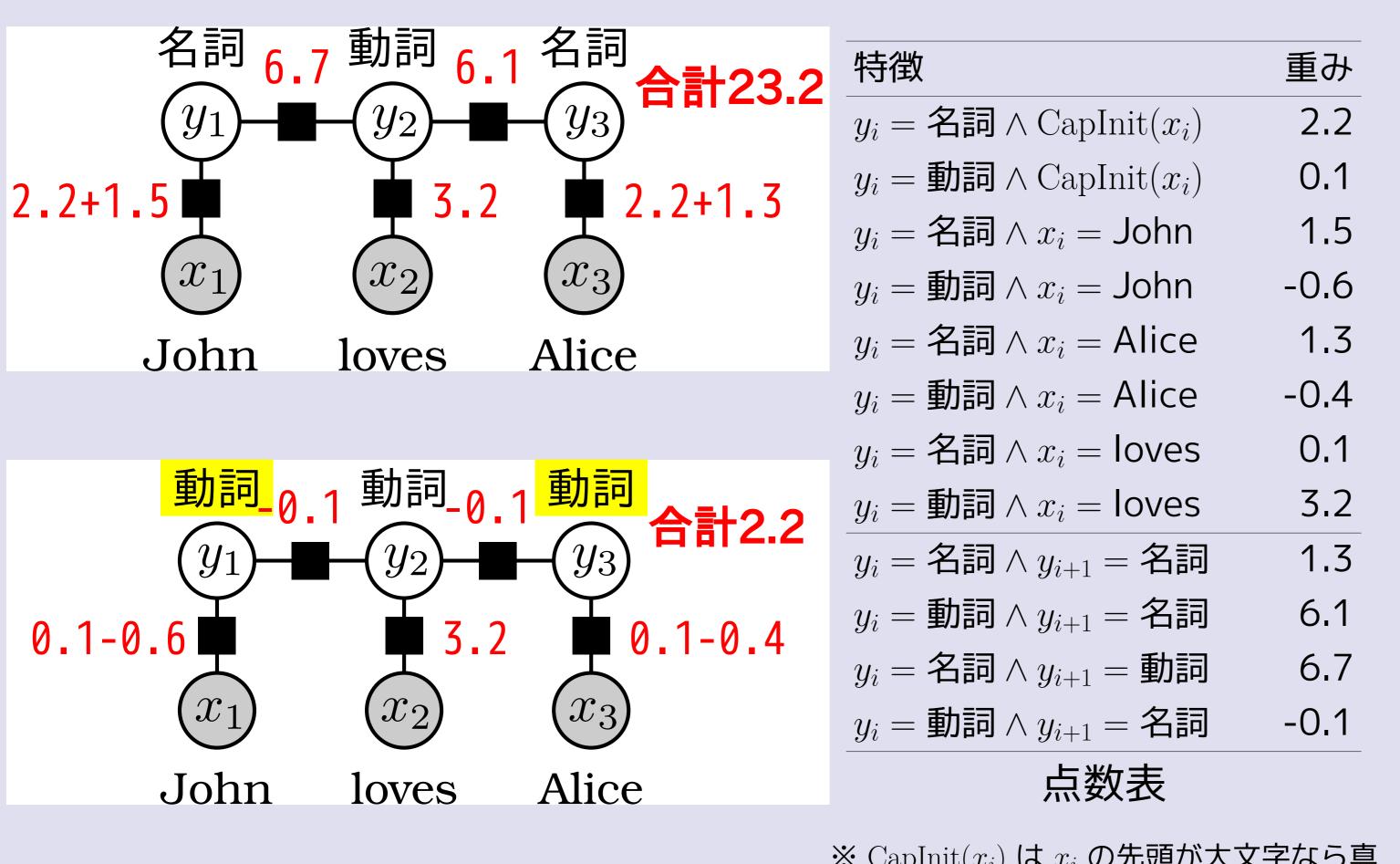
- ・高度な型は検査や推論が決定不能
- 目標・論理的手法では決定できないことを統計的
- ヒューリスティックスで解決したい
- ・型付けに機械学習の統計的手法を導入

準備: 条件付き確率場 [Lafferty ICML2001]

- ・確率変数の間の複雑な依存関係をグラフで表現
- ・自然言語処理などで用いられる確率モデル

具体例:"John loves Alice" の品詞予測

- ・因子ノード(黒い四角)ごとに点数を計算
- ・合計点数が最大となる品詞の割り当て方が正解 (の可能性が高い)



 $X CapInit(x_i)$ は x_i の先頭が大文字なら真

特徴関数:単純型付け規則を弱めた規則

例:T-WeakIf1 $\frac{M: au' \quad N: au \quad K: au}{\mathbf{if} \ M \ \mathbf{then} \ N \ \mathbf{else} \ K: au}$ T-Weaklf2 $\frac{M: \mathbf{Bool} \quad N: \tau \quad K: \tau}{\mathbf{if} \ M \ \mathbf{then} \ N \ \mathbf{else} \ K: \tau'}$ T-Weaklf3 $\frac{M: \mathbf{Bool} \quad N: \tau \quad K: \tau'}{\mathbf{if} \ M \ \mathbf{then} \ N \ \mathbf{else} \ K: \tau}$ T-Weaklf4 $\frac{M: \mathbf{Bool} \quad N: \tau' \quad K: \tau}{\mathbf{if} \ M \ \mathbf{then} \ N \ \mathbf{else} \ K: \tau}$

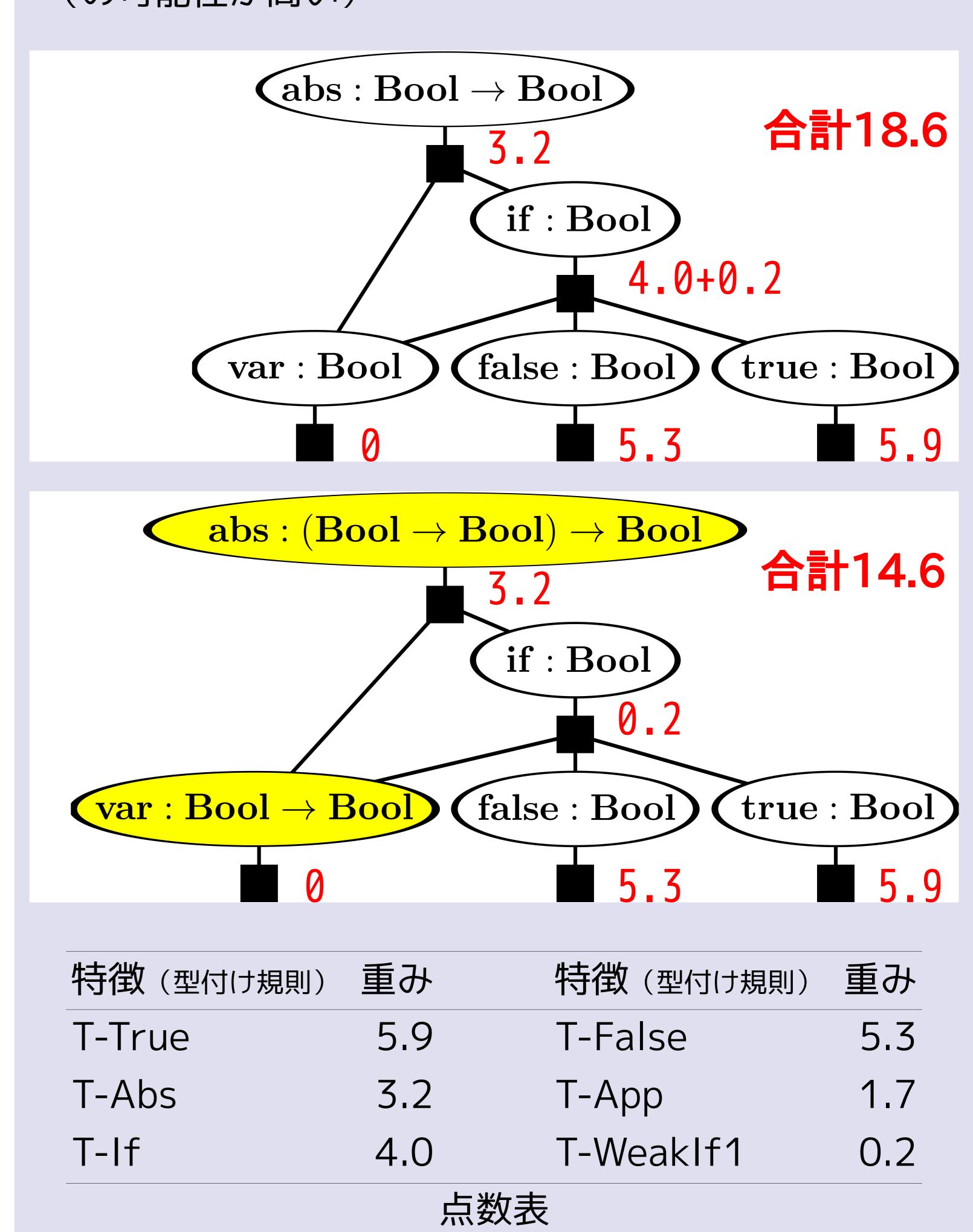
- ・型付け可能な式:弱めた規則のみで正しく推論可能
- ▶点数最大化のため全ての規則を同時に適用し T-If と同じ規則になる
- ・型付け不可能な式: well-typed らしさを計算
- ▶型付け不可能なλ式でも可能な限り型を合わせる
- より多くの規則が成立すれば、点数が上がる

提案手法:条件付き確率場による単純型付け

(同一変数の頂点をマージした)型注釈付き AST に 点数を付ける

具体例: λx .if x then false else true

- ・因子ノード(黒い四角)ごとに点数を計算
- ・合計点数が最大となる型注釈の割り当て方が正解 (の可能性が高い)



重みの学習と型推論

型付け規則学習

·入力:訓練集合(自動生成した単純型付き\式800個)

・出力:重み(型付けに有用な規則の重みは大きくなる)

型推論(学習した重みを使用)

・入力:型無し λ 式

・出力:点数を最大化する型注釈

▶予測可能な型注釈

Bool, Bool \rightarrow Bool, Bool \rightarrow Bool, Bool, $(\mathbf{Bool} \to \mathbf{Bool}) \to \mathbf{Bool}$

デモ: http://bit.ly/1Qc3MxV